

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 カフカ 『断食芸人』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 109 回のツイキャス読書会の課題図書は、カフカの『断食芸人』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

断食芸人を読んで。

断食芸人ってなんだ。

昔は、予約席を設ける程 人気のあった断食芸。

興業をうって、断食をする芸。

断食芸は、除去に人気がなくなり興業主と別れサーカス一座に身を置くことになる。

断食芸人の希望どおり、40 日の制限から解放される。断食を続け最期は、餓死する。その後、そこには、ヒョウがいれられる。

これだけの短いお話ですが、種々な印象が、残りました。

芸は、観衆が必要か？

視点を一つにすると。

主人公は、断食する事によって

自分の生を、求め確認しているのではないか！

サーカスに入る前は、生業だったでしょうが。

芸を積み重ねていくと、観衆も関係無くなり自分と向き合うようになるのではないか？

断食を続けて行けば、神に近づく(一つの事に全てを、捧げる)

断食芸人は、餓死して幸せになったんだろうな。

このお話自体が、断食芸人。

芸でなくても、日々のお務めさえ生の実感を得たいがため。

それにしても、檻が気になりました。

(おわり)

『断食芸人』 感想文

断食芸人を今回初めて読みました。

岩波文庫版だと「変身」と一緒に入っているせいか、この断食芸人が断食中、食事をまったく摂らない(あるいは、好きな食べ物が無いから摂れない)のは、変身のグレゴールザムザが、家族から食事をいろいろ与えてもらうが、食べない描写と重なっている気がした。

断食芸人読んで一番強く感じたのは、本人は命さえも惜しくないほどガチで断食という行為を行っているのだが、人々はインチキだの、すぐ飽きてしまう様子に、なんだかピコ太郎や、スギちゃんのような一発芸人であったり、この前の女子駅伝で四つん這いで気合いのゴールする人を思い浮かべてしまった。

「自分はまだやれるっす！」と、本人は言うけれど、や～、君は、もう需要ないからと、飽きたら寒い芸というか、世間からゴミのように捨てられてしまった人々の教訓がこの断食芸人にはある気がします。

たとえ一つの道で成功しても、その技だけに頼らず、技を磨くというか幅を拡げる必要があるのかもしれないと思いました。

この断食芸人は技磨いた結果、技の深化をしたような人で、ひょっとしたら死んでから評価をされるタイプかもしれないと思いましたが、断食芸人が亡くなった後、豹の人気をみると、断食芸人が風化して当然みたいな形で終わるのがカフカらしいと思いました。

そう言えば、上野動物園のパンダのシャンシャンもある程度、成長してからは人気が大いぶ落ち着いてきている気がするので、シャンシャン的には良かったのかもしれない。

感想文を書きながら、パンダに到達するなんて、僕は一体何を讀んだんだろう。

(おわり)

『ペット』

「断食芸人」の断食という芸は、私に、テレビ番組「モニタリング」のプログラム「爆食三姉妹」を思い出させた。可愛い女の子の三人組がめちゃくちゃ食べる姿に驚く男子を見て笑うプログラムだ。

大量の料理が女の子の胃袋に放り込まれ、無くなっていく。入るはずのない量が、異次元へ吸い込まれるように無くなっていく。無限の欲望を見せられた男子は、ただ呆然とする。

呆然としている男子を見ていると笑ってしまう。肩に手を置いて「女の欲望は果てしないのですよ」とお伝えしたい。

それに比べて、断食芸人である。断食は男の意地なのか。

「俺は食わないと決めた。それが、俺のプライド」

「何で食べないの？」

「食べないと決めたから。That's all.」

意志の力である。

断食を、何かしない事を証明するには、その間、拘束され、見張られなくてはいけない。不自由な人生だ。

しかし、彼は自らそれを望んだ。断食へ情熱は、彼を檻に放り込んだ。見る者がいなくなり、忘れられている間も彼は芸を続けていた。

サーカスの親方に発見された時、彼はもう感心しないでくれと言った。「他にどうしようもなくこうしているのだから」と。「美味いと思う食べ物が見つからなかった」のだと。

始めは、芸のための決意だったのかもしれないが、今やそれは彼自身の性質になっている。受け入れることが出来なくなったのだ。食べ物を、命を、外部を。世界との関わりを失った断食芸人は、消滅するように息を引き取る。

意志の力は、私たちを檻の中へ閉じ込める。一度檻の中へ入ってしまえば、そこは安全で快適な場所になるのかもしれない。欲望に振り回されて生きるよりも、自由だからだ。

「鍵を持ったまま、檻の中で生きる」そんな自由のイメージを思い浮かべて、暗い気持ちになる。それよりは「檻の中の若い豹」のイメージに魅力を感じる。

欲望に振り回されぬよう、意志に閉じ込められぬよう、一匹の豹を心の中に住まわせてみる。檻の事など気にもしていない若い豹を。

(おわり)

『美味いと思うたべもの』

私にとって断食はかなり遠い存在な気がします。

制服のスカートのホックの位置がどんどんと後退してきてやっと、甘いものを控えようかとなるぐらいで、断食芸人の気持ちは分かりかねるなと思いました。

断食芸人の言いたかった事は何なのか、何のために断食をしていたのか正直よく分かりませんでした。

最後、サーカスの親方になぜ断食をするのかを打ち明ける所で、

(引用はじめ)

『美味いと思う食べ物が見つからなかったからなんだ。見つかってさえいればな、世間の注目なんぞ浴びることなく、あんたやみんなみたいに、腹いっぱい食べて暮らしていただろうと思うけどね』P128

(引用おわり)

と、言っていて少し複雑な気持ちになりました。

断食芸人は世の中の美味しいものを知らないだけじゃないか？

カッコつけて言ってるだけなんじゃないかな？ と思いましたし、私は世の中には美味しいものが溢れていてまだまだ知らない美味しいものを発見したいぐらいなのに何故なんだろう？ と思いました。

普通の人はお腹が空けば何か食べるし、それは当たり前の習慣でそうしなければ生命維持も出来ないから必要な事だけど、お腹が空くと何でも美味しく食べるのは家畜と同じだと思っているから？ と思えてきました。

皆は何の疑いもなくお腹が空くと食べる、食べることで幸せを感じるそんな人達とは自分は違うのだ！ と言いたかったのかな？ と。

もしそうだったら、かなりひねくれて嫌な人だなと思いました。それは私の勝手な思い込みだと思うので、やはり私には断食芸人の気持ちはよく分かりません。

(おわり)

「変身」同様、ザ・惨め

今回、久しぶりに「断食芸人」を読み返し、カフカの代表作「変身」と、構図やムードなどが共通していると気付いた。

「変身」は、カフカ作品で初めてまともに読んだ小説だった。カフェに入って読んだのだが、シュールすぎて途中から笑いをこらえられなくなり、出ざるをえなかった。あんなに笑いが込み上げた小説は後にも先にもない。それ以降、しばらくカフカマニアになっていた。

「断食芸人」も「変身」も、読んでいて、こんなふうにはなりたくないと感じる。主人公の人生が下り坂で、ひたすら報われない努力をしている。晩年はゴミ屑のように扱われ、死後、残された人々や場が元気になり、本人は忘れ去られる。断食芸人は存在自体が笑い者だ。

あそこまで徹底的に、滑稽なまでに惨めな人物を描くのは、カフカと太宰治くらいしか思い付かない。他の作家は、惨めでもどこかカッコ良かったりする。惨めかつ滑稽という、人間が生きていて最上級の恥辱をしっかりと小説にしようとするカフカは、一体何を考えているんだろうと思った。

だが、これもまた人間の一側面であり、そういう人生を送っている人は確実にいる。僕自身、断食芸人やグレゴールのような状態に陥っていると感ずることが、たまにある。いや認めたくないが、実際は常にそうなのかもしれない。

考えてみると、皆ある程度、断食芸人的だ。カフカは、現代社会で生きていくためにもがき苦しむ悲哀やおかしさを、痛烈に感じていたのだと思う。それをそのまま描写することで、間接的な社会批判にもなっている気がする。

また、カフカはそういう気分を小説にしなくては、精神的に落ち着かなかっただろう。小説にすることで、モヤモヤを客体化した。それでも惨めかもしれないが、客体化は大きなステップだ。

僕自身、カフカの小説を読むと、自分の中のモヤモヤとしたものにシュールな形が与えられ、笑ってしまえる。そして惨めさも人生の重要な要素であり、見方によってはエンターテインメントなのだと気付かされる。

(おわり)

レジュメ

報告者 エヴァタ

・患者情報 D・G 殿 30代 男性

・診断名及び障害名 拒食による全身衰弱、筋力低下、廃用症候群

・経過 見世物小屋で断食を行っていた際に意識消失し監視人が救急要請、A 大学病院救命センターに搬送。搬送時意識清明。やや低血圧だがバイタルは異常なし。CT で脳に著名な所見なし、レントゲンで骨折等も見られず。心電図問題なし。血液検査で若干の炎症見られた。また著名な低栄養見られた。やや低血糖であったがその他異常値はみられなかった。消化器に異常なし。

食事、栄養補給の点滴全て拒否。全身衰弱、筋力低下が著名であり、独居で介護者もいない為自宅退院困難。精査加療、リハビリ目的で当院に転院となる。

・主訴 何も食べたくない、眠りたくない

・ニード もっと断食を続けたい。また檻の中に入りたい(ベッドの周りは全て柵で囲ってほしい、布団より藁の上で眠りたいなど意味不明な発言あり)

・服薬状況 栄養剤、胃腸薬、睡眠薬など全て拒否

・理学療法評価 リハビリスタッフと会話に応じるが検査や歩行は拒否。ずっと喋り続けているが小声で聞き取りにくい。痩身、四肢体幹筋力低下著名、自分で体を起こす事は可能だが立つ、歩くは不能。

・他部門情報 看護師より。会話には応じるがケアや水分や食事など一切拒否。夜間明かりを消さずに自分を監視してほしいと話される。また一晩中歌っていることもある。

・問題点 拒食による低栄養、ケアの拒否、歩行困難、夜間不眠、在宅復帰困難。

と、ここまでパソコンに入力して男は手を止めた。このままいけば確実にかれは餓死をするだろうが、果たして自ら望み断食を続け、睡眠もとらない、栄養失調で歩けない以外に特に身体的に問題がない人に医療はどう介入すべきだろうか？

彼は何も困っておらず、そんな彼に困っている我々が無理やり彼を、我々の型にはめていないだろうか？

私達自身こそ家族や社会の型にハマリ、誰かに監視された檻の中の居心地がよいと考えているのではないか？

いや、ダメだ。こんな事をカンファレンスで言えるわけがない。

なんとか問題点を抽出しプログラムを立案しなくては。これは仕事だ。自分や家族、病院や国家の為、何より患者の為であるのだ。

男はそう自分に言い聞かせ、腹が減るのも忘れタイムカードを押した後のデスクワークに戻るのだった。

(おわり)

『断食芸人』感想文

小説「断食芸人」の内容の展開がカフカ自身の執筆活動、出版歴と妙に符号するところがあるので、断食芸人＝カフカということで感想文を書くことにした。

「断食芸」の究極は、自己の生存本能を抑制することによって最終的に自己の消滅、『死に至る病』を意味する。そこには「未知の糧＝うまいと思う食べ物」を見つけられなかったという深い絶望があった。

最初、断食芸人は観客の喝采を浴びていて、外面的に見れば芸人として社会的成功を収めていた。だが、興行主が断食期間を四十日間と限定するなど、断食芸人の本来の欲求である断食が十分にできない不満もあった。ここでは、断食芸人が世間と妥協しながら生きている姿が描かれており、そこには自分の実存についての欺瞞が隠されていた。

次に、断食芸人はサーカスに移る。断食芸人の檻が置かれるのは、舞台の真ん中ではなく、外の動物小屋への通路であった。観客が見たがるのは動物の豹であり、断食芸人の観客を求める心を無視して、人々は彼の前を通り過ぎていく。やがて、断食芸人は観客を望まぬ「あきらめ」の境地から、彼の本来の欲求、純粹断食がきるようになった。

あるとき、断食芸人はサーカスの一人の監督と言葉を交わす。それは、断食芸人にとって自然な欲求である断食芸に世間の賞賛を求めたこと、その「自己欺瞞」に対して世間の人々に赦しを乞うたのである。結局、断食芸人は「うまいと思う食べ物」＝「満足のいく作品の完成」を見出すことなく死ぬ。だが、彼のかすんだ眼には、おれはもっと断食＝書きつづける、という固い確信の色が見えた。肉体は滅びても、魂は死なず、みたいだ。

断食芸人が断食によって死に向かいつつある時、彼の対立項、純粹生命力を具現する豹が登場する。死にゆく断食芸人(タナトス)と、反対に生の欲動(エロス)として認識される豹の出現は、生死のバランスを程よくとって、そこに「世界は滅びない」という見ざる力の存在を感じさせられた。

(おわり)

『 美味しい食べ物 』

(引用始め)

「美味しいと思う食べ物が見つからなかったからなんだ。見つかってさえいればな、世間の注目なんぞ浴びることなく、あんたやみんなみたいに、腹いっぱい食べて暮らしていただろうと思うけどね」それが最後の言葉だったが、その光を失っていく瞳に浮かんでいたのは、もはや誇らしげでこそなけれ、まだ断食を続けられるぞ、という強固な確信であった。

(岩波文庫 P.128)

(引用終わり)

この断食芸人最後の言葉で、彼の命をうばったのは断食ではなく、自身の膨れ上がった矜持に飲み込まれたせいではないかと感じた。

断食芸人は、40日間の興行では飽き足らず、「このまま断食を続けて、古今東西もっとも偉大な断食芸人になるという栄誉」を信じ、さらなる高みに登りつめようとする。そして、それを観衆の方が、なぜ40日間以上我慢できないのかと腹立たしく思う。

だが、彼は「芸人」なのだ。断食を見世物にして、生活の糧とするプロのはずだった。観衆の前に断食を披露したいのなら、観客が飽きる40日間で断食を打ち切り、次の断食までに体調を整えるのが「芸人」としての正しい姿のように思う。世間に認められたい承認欲求と自らの自己研鑽の区別がつかなくなったように思えた。

承認欲求を満たすには、他人の欲求も鑑みなくていけない。流行りの YouTuber も自らの欲求だけではなく、他人の欲求を体現して人気を集めている。ただの自己満足に観衆は興味を惹かれない。

断食芸人は、自らの「断食」の才能にのめり込み、もっと先へ行きたくなる。それは、自らの欲であって、もはや「芸人」ではなくなっていた。

藁の中に沈む死にかけの人間を観衆は観たいと思っていなかった。「まだ断食を続けられるぞ」という強固な確信は、芸人としてもサーカスとしても何の役にも立たない。その証拠に、芸人亡き後の檻に入れられた若い豹に観衆は群がり、豹から漏れる「生きる喜び」にうっとりするのだ。

「美味しい食べ物」は、断食芸人にとっては何であったのだろうか。彼の自己表現の手段は間違いなく「断食」だった。だが、親方のように腹いっぱい食べて暮らしている人間に対する皮肉を投げたつもりが、彼にとっての「美味しい食べ物」が「断食」であったとする断食芸人自身に対する強烈なブーメランとして返ってきたために、彼は命を落としたように思うのだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『悪魔の試み』

(引用はじめ)

兼好は、こういう事を言っている。死は向こうからこちらにやって来るものと皆思っているが、そうではない。実は背後からやって来る。沖の干潟にいつ潮が満ちるかとは皆ながめているが、実は磯の方から満ちるものだ。

小林秀雄『考えるヒント 青年と老年』文春文庫 P.212

(引用おわり)

断食興行が四十日で終わりを迎えるのは、四十日四十夜断食の後にイエス・キリストが空腹を覚えて『悪魔の試み』にあったという新約聖書の記述(マタイ福音書第四章)を下敷きにしているからだ。興行師は、潮時をわきまえていた。断食芸は、「悪魔の試み」のパロディだった。

時代の潮流は、マスメディアの発達と娯楽の多様化によって急激に変化し、聖書を背景とした物語は、もはや誰にも感銘を与えなくなった。

『断食の幕を早くおろしすぎた結果である姿が、その原因を演じさせられているのだ。この無分別の、無分別なこの世に対抗して戦うのは、不可能だった』P.120

信仰の基盤は、すでに掘り崩された。磯から満ちてきたのは世間の無分別であり、断食芸人の背後から迫ったのは、究極的には「神の死」だ。皮肉にも、断食芸人の物理的な死は、神の死の後にやってきた。

現代の断食芸人が葬られたあとに、檻に鎮座ましますのは きっと、カツ丼 6 キロ、あるいは、寿司 100 貫を屈託のない笑顔で完食する、若くてそこそこかわいい女性 YouTuber である。そして、彼女たちの驚異的な食欲と、一抹のさみしさの影差す笑顔の背後に、満ちてくるのは一体何か？

「大食いは食べ物を粗末にしている」という批判云々も、的を射ているのだが、ネットは摂食障害を消費するという売笑行為に、みんなが無分別である。絶望を意識しない絶望である。もしかすると、カメラを止めてから反省して、もっと楽しそうに大食いできるのに、と彼女らは吐きダコをこしらえながら、大食い芸を磨いているかもしれない。あるいは、努力もしていないかもしれない。いずれにせよ、現代において、食べ物以上に粗末になっているのは、無分別によって麻痺していくお互いの関係である。

ゆるやかに満ちてくる気配がする。磯から。背後から。

「これが人間か」と嘆息するような、粗末で無自覚で絶望的なしょーもなさから。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343